

知的障害特別支援学校高等部における卒業後を見据えた学びについて IV

卒業生への生活状況調査を通じて得られた結果からの考察

キーワード：卒業後、生活調査、知的障害特別支援学校、進路選択、ライフステージ、ウェルビーイング

研究目的

○知的障害特別支援学校の高等部段階では、進路選択は重要なファクターとなる。

○進路指導・支援やキャリア教育に関する研究は、一人ひとりの社会的、職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促すというキャリア教育的観点によるものや、学校組織における進路指導部を中心とした構造的な在り方の分析を扱った研究は多く見られる。
→高等部卒業生を対象に卒業後を踏まえて高等部時に必要だった学びについて検討した研究は多くは見られない。高等部卒業生への生活状況調査を実施することで、現在の困難さ等の実態を明らかにし、高等部の教育課程に反映することが今後必要であると言える。

○本研究では、高等部卒業生への生活状況調査を通して、知的障害特別支援学校高等部における卒業後を見据えた学びを検討することを目的とする。

研究方法

1. 対象

2018(平成30)年度から2024(令和6)年度までの本校卒業生33名を対象に実施。

2. 調査項目

菅野(2012)の提唱する「生涯発達・地域生活支援の4領域」をもとに「職業・仕事」、「生活・暮らし」、「余暇」、「健康」の4領域を軸に進路変更や、コロナ禍以後の業務内容の変化、SNSなどネット社会との関わり方、AIによる仕事や生活への影響等を加えた62の質問項目を作成した。これらを「令和7年度 卒業生生活状況調査アンケート」として実施した。

3. 調査方法

対象者に対して、郵送にてアンケートを送付し、それに回答してもらう形式で実施した。これらに加えて、複数名にインタビューを実施した。具体的な方法としては、本校卒業生の中から抽出した複数名に対して、「職業・仕事」、「生活・暮らし」、「余暇」、「健康」の4領域に対して質問項目を設定し、一つの質問項目に対して概ね4~12択の選択肢を設け、その中から選んで回答するという方式を採用した。また、設問によっては記述欄を設けることで、補足的な説明を可能とした。なお、自力での回答が難しい卒業生に関しては、保護者や協力者に回答の協力を依頼した。また、今年度の変更点としてGoogleフォームでの回答についても可能とした。

4. 調査時期

2025(令和7)年10月から12月で実施した。

5. 手続き

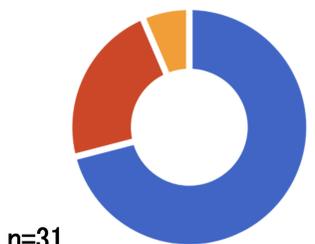
アンケート結果を基に、各質問項目を単純集計し、グラフ化した。

6. 倫理的配慮

本研究は2025年10月21日付で大阪教育大学倫理委員会より承認(受付番号:25148)を受けて実施。対象卒業生及び、未成年の場合その保護者に研究について説明を行い、研究参加への同意を得た。

卒業生たちが現在感じている心理的側面 (R7年度卒業生生活状況調査アンケートより抜粋)

今(いま)の進路先(しんろさき)に納得(なっとく)していますか。



n=31

今の進路先に納得していますか？

今(いま)の進路先(しんろさき)で「②、③、④」を選(えら)んだ人(ひと)で悩(なや)みや困(こま)っていることは何(なん)ですか。(複数(ふくすう)回答可(かいとう)か)



n=31

今の進路先で悩みや困っていることは何ですか？

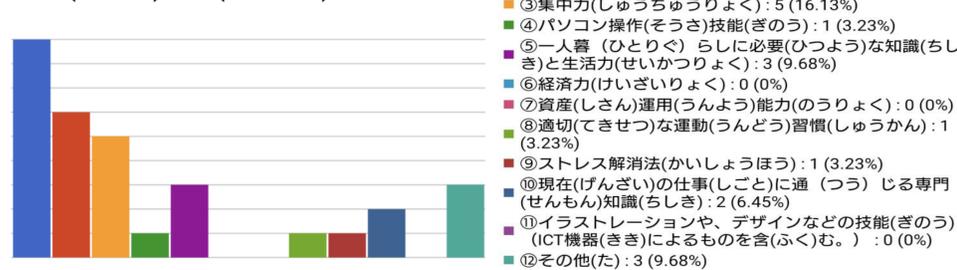
今(いま)の進路先(しんろさき)で悩(なや)みや困(こま)っていることはありますか。



n=31

今の進路先で悩みや困っていることはありますか？

現在(げんざい)身(み)に付(つ)けたい力(ちから)については、次(つぎ)のうちどれですか (複数(ふくすう)回答可(かいとう)か)



現在身に付けたい力は次のうちどれか

考察

【アンケート結果より】※以降、昨年度研究 迫田,今枝 (2025) との比較から

・「現在の進路先に納得しているかどうかについて」「納得している」が79%から71%に減少し、「まあまあ納得している」が17%から23%に増加した。一方で昨年度見られなかった「あまり納得していない」が6%増加傾向が見られた。また、「今の進路先で悩みや困っていることはあるかについて」の問いでは、「全くない」が62%から52%へと減少した。逆に「少しある」については25%から36%へ増加し、「まあまあある」の割合は13%から10%へ減少した。昨年度は見られなかった「とてもある」についても3%見られた。さらに、それらの要因について質問してみた結果、「進路先の人と上手くいかない」が10%から16%に増加し、最多となった。また、「仕事のことで上手くいかない」が3%から6%へと増加し、「もっと他の仕事をしてみたい」は3%から10%へと増加した。「今の仕事が嫌になってきた」については回答するものは見られなかった。

・「現在身に付けたい力」については、「人との付き合い方」、「集中力」等の指標が昨年度同様多く見られた。これに対して「一人暮らしに必要な知識と生活力」や、「ストレス解消法」、「適切な運動習慣」などの数値が減少した。特に「適切な運動習慣」については大きく落ち込みが見られた。理由としては、「時間がない」、「必要性は感じるが、あえてここに特化しようとは思わない。」といった意見が多かった。

・結果より、高等部のカリキュラムとして適切な補強を行うべき事柄は、社会科領域の充実、特に社会のルールや法律など社会生活を生き抜くために必要となる知識と経験や、「キャリア教育領域の取組の充実」、「保健体育領域」、国語、数学等の基礎的な学力保障、余暇活動の充実についても引き続き大きな課題があると言える。これらに加えてICT機器の取扱いやネットリテラシー能力の底上げ等情報分野の取組の充実が必須である。また、情報分野に関してはこの1年でさらに急速に拡大し、身近になったAIやロボットを組み合わせたフィジカルAIの普及や、その利用について正しい知識と、利用する上でのリスクマネジメントについての内容伝達が急務であると言える。また、セカンドキャリア以降の進路先の探し方についても伝えていく必要がある。【今後の課題】としては、これまで述べてきた総合的な支援が『卒業生たちがより良く豊かな人生を歩むことができる』ための方策であり、今後も最良の支援を検討し続けることこそが最も必要とされる最適解であると考えている。

引用・参考文献(主なものを抜粋)

○中央教育審議会(2011) 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)

○文部科学省(2015) 特別支援教育の現状と課題 教育課程企画特別部会 資料3-3

○片山陽子・今枝史雄(2020) 知的障害児の成人期を見据えた教育課程・教育内容の検討 障害児教育研究紀要 = Special needs education research (42), 69-80,

○迫田真喜・今枝史雄(2025) : 知的障害特別支援学校高等部における卒業後を見据えた学びについてⅢ-卒業生への生活状況調査を通じて得られた結果からの考察- 大阪教育大学附属特別支援学校 研究紀要 69-76